

## 再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2004年5月29日(No.206)～6月17日 (No.264)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

### [再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)

■ 264 国家権力・法・モーセの律法・教会

[山谷](#) - 2004/06/17 09:58 -

再建主義者は、現代社会においてモーセの律法を司法制度や税制に適用せよ、と主張しています。

しかし、これまで論じて来ましたように、国家の絶対主権としての「領域主権」は、キリストの頭首権に由来するものであり、国家権力とはくキリストの高挙によって打破され・武装解除され・従属させられた「悪鬼的天使的勢力」(位・主権・支配・権威)が、宇宙の支配者としてのキリストの「王権」(裁きの権能)を、地の支配に関する部分に限定して委任されて、地上の統治を行っている>ということなのです。[\(新約聖書の世界観的パラダイムに基く「三位一体的統治の概念図」を参照のこと\)](#)

つまり、国家権力は、悪を罰し・善を奨励することをもってく社会の秩序と安寧を維持することを、神から与えられたミッションとしているのであり、その目的達成のために自由に国家の公法を定めることが出来るのです。

このことについては、国家の統治者は「国家に必要かつ有用であると思われる諸法律を発布する自由を持つ」、とカルヴァンが述べていることと一致しています(ピーター・バルト、ヴィルヘルム・ニーゼル編『カルヴィン選集』第5巻487ページ)。

さて、キリストの頭首権に従属するく打破された悪鬼的天使的勢力である位・主権・支配・権威>が、社会の秩序と安寧を維持するというミッションを達成するために諸法律を制定する自由を持っているという、現経綸(中間時の中間領域の天使的勢力)は、モーセの律法と比較して見た場合、大いなる利点を持っています。

たとえば現代の国家は、サッカー場で騒動を起こすフリーガンを規制する法律を制定することにより、社会の秩序と安寧を維持し、だれもが安心してサッカーの観戦を楽しむことができることを保障するのです。

これに対して、モーセの律法は、サッカーを知らず、フリーガンを知らないのです、そこから決疑論的に推論しても、フリーガンを規制する法律を導き出すことが出来ないのです。このため、モーセの律法によっては、現代における社会の秩序と安寧の維持というミッションが、達成できなくなってしまうのです。

しかし、国家権力が必要に応じて自由に法を制定できるのであれば、国家権力の悪鬼化が助長

されるのではないだろうか？

この「国家権力の悪鬼化」を監視し、抵抗権を行使するのが、＜キリストのからだである教会＞のミッションなのです。歴史の中で教会がこのミッションを遂行して来た結果として、近代国家においては、＜国家と国民の間の明文化された政治契約である「憲法」＞が、国家権力を制限し、また、＜憲法に根拠し・国民の参加によって立法された「諸法律」＞が、国家権力の行使を具体的かつ詳細に規定することにより、＜国家権力の悪鬼化を抑制するシステム＞が形成されているのです。

■261 「おことば」を、そっくりそのままお返しします [山谷](#) - 2004/06/16 16:11 -

以下は、再建主義者からわたしに対して送られた「おことば」を、わたしの立場に立って、そっくり書き換えたものです：

再建主義者の解釈を見ると、自分の思いが先行していて、神の啓示などどうでもよくなっている。その証拠が、「自分の説を他の個所と調和できない」というところにある。

律法は廃棄されていない、という再建主義者の説は、

「（キリストは）御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの**律法を廃棄されました**」（エフェソ2:15）

「律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。・・・しかし、信仰が現われたので、もはや、わたしたちはこのような**養育係（律法）の下にはいません**」（ガラテヤ3:24-25）

「神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた**証書を破棄し**、これを十字架に釘付けにして**取り除いてくださいました**」（コロサイ2:13-14）

「わたしは神に対して生きるために、**律法に対しては律法によって死んだのです**」（ガラテヤ2:19）

「民はその祭司制度に基いて律法を与えられているのですから・・・祭司制度に変更があれば、**律法にも必ず変更があるはず**です・・・このことは、メルキゼデクと同じような別の祭司（イエス・キリスト）が立てられたことによって、ますます明らかなです。・・・その結果、一方では、**以前の掟（律法）が、その弱く無益なために廃止されました**。律法が何一つ完全なものにできなかったからです」（ヘブライ7:11-19）

・・・という個所と絶対に調和できない。

再建主義者は、神の恐ろしさを知らない。

■260 ゆるやかな肉のわざのリスト [山谷](#) - 2004/06/16 15:39 -

十字架によって打破され、武装解除され、キリストの頭首権に従属させられ、キリストに仕えている、悪鬼的天使的勢力である＜国家権力＞は、悪を見つけ次第ただちに罰するというミッションを授けられています。しかし、国家権力の本質が、悪鬼的であることから、その本性を発現させて、キリストの頭首権に由来する権力を濫用してしまうケースが過去に多く存在したことから、キリスト者は良心に基づく抵抗権を行使して、「国家権力を制限する」ための歴史

的な戦いを積み重ねて来ました。その結実として、近代国家は、国家と国民の間の明文化された政治契約である「憲法」によって国家権力を制限し、また、憲法に根拠し・国民の政治参加によって立法された「法律」によって、国家権力の具体的な行使を詳細に規定し、それらからの逸脱を監視する制度も、整えられるようになりました。

これに対し、信仰共同体に課せられたミッションは、裁くことでもなく、罰することでもなく、あくまで、魂を救い、聖徒を育て、苦しむ人類に仕える、ということがミッションなので、すから、**＜「肉のわざを現したクリスチャン」が確認されたとしても、ただちに罰しようとする姿勢で臨むわけではなく、そのクリスチャンが悔い改め、靈的に回復され、キリストにしっかり結びつき、引き続き聖徒として成長することが出来るよう、「牧会的配慮」を行おうとする姿勢で臨む＞**わけなのです。

つまり、国家権力が「裁き」という旧経綸で動くのに対して、信仰共同体は「恵み」という新経綸で動くのです。

ですから、信仰共同体・監督・長老が、「肉のわざのリスト」の該当者を見つけ次第、間髪入れずただちに裁いて、切り離し、サタンに引き渡すようなことは、普通はくないのです。

まず非行の事実を知った信者仲間が個人的に本人に訓戒し、それで本人が悔い改めないならば、ひとりの長老に報告して、共に訪問し、訓戒し、それでも悔い改めを拒否するならば、長老団が最終的な警告を行い、それでもだめなら、除名を実行する、という、何段階ものステップを踏むわけです。

このステップを踏んで行っている途中で、本人が悔い改めるなら、信仰共同体は「ゆるし」を与え、＜あたかも、まったく何事もなかったかのように、すべてを忘れて＞その本人を、交わりの中に迎え入れるのです。

それゆえ、「肉のわざのリスト」は、刑法や民法としての役割を兼ねていた「モーセの律法」とも、近代国家の「諸法律」とも、本質的に性格を異にするものなのです。

今日の諸教会を見ますと、「肉のわざのリスト」に基づく教会戒規の執行が、必ずしも厳格に行われているわけではない、という現状があります。これが、再建主義者が現代の教会を忌み嫌う最大の理由でありましょう。

しかし、これは、再建主義者が、「悪を罰する」国家権力のミッションと、「牧会的配慮によって聖徒を育てる」教会のミッションとを、その平板かつ粗雑な聖書釈義のゆえに、頭の中で完全に混同させてしまっていることが原因なのです。

ところで、「肉のわざのリスト」の末尾にある「その他、この類のものである」という＜あいまい規定＞については、たとえば、コカイン・ヘロイン・大麻など、聖潔の生活にふさわしくない薬物使用を、信仰共同体の判断により「肉のわざのリスト」に追記することを可能にするためのものです。

再建主義者は＜モーセの律法に記されていないことは、すべて自由だ＞という原則ですから、もし律法から決疑論的に麻薬禁止が推論出来ない場合には、自由に麻薬を使用してよいことになってしまいます。

しかし、新経綸に生きる信仰共同体は、キリストに結ばれたひとりひとりが、聖霊によって聖化され、キリストに似た者へと変えられて行くことを目標とする「終末論的な聖化の共同体」なので、すから、主の御霊に統御されていない肉の働きに関わるものはなんであれ、モーセの律法とは無関係に、「肉のわざのリスト」に追記することが出来るのです。

それが、「その他、この類のもの」という、＜あいまい規定＞の役割です。

■259 これで最後にいたします

Zion - 2004/06/15 18:57 -

山谷先生

お忙しいところ、お答えをありがとうございました。  
感謝いたします。

「肉のリスト」については、廃棄されたはずの律法と、だぶるような禁止規定があるかないかという問題はとりあえず不問ですね。了解いたしました。とにかく、大切なのは、初臨と再臨の間の「メシア的中間時」においては、「肉のリスト」は、信仰共同体が＜解き・また・つなぐ＞ために、必要であるということですね。

その点について、最後に私の思うところを申し上げさせて頂ければ、たとえば、「肉の業のリスト」である、ガラテヤの5:19以下にあるような「不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである」というリストは、その一つ一つの肉の業と言われているものを、実際適用しようとする、解釈の幅が発生すると思うのです。しかも、「そのたぐいである」などと言われると、もう何でも肉の業に出来てしまうような気がいたします。実際、どのような行為を「不品行」と見なして指導するのかは、結局、長老なり監督なりの主観による解釈にゆだねることになります。

近代法が、「してはならないこと」を細かく細分化して規定しているのは、そのような人間の主観による判断の余地をなるべく入り込ませないようにすることで、統治権力の横暴を阻止するという意図がありますね。なるべく細かく細分化して、文書による客観性を高めることで、裁判官の主観によって、罪に定められるようなことがないようにしているわけですが、それでも、「肉のリスト」のように、いかようにでも解釈、適用できる基準となりますと、長老なり監督なりの権威者による「肉の業」の解釈に、信徒は身を任せるしかないということですね。私はクリスチャンといえども、人間のする判断を全面的に信用できない不信仰なものですから、そのあたりの客観的な基準について、教えて頂きたかったのですが、「肉のリスト」しかないというお答えを頂きましたので、これにて質問を終わらせて頂きたいと思います。これからは、人、特に権威者を信用して生きなければならないなあと思わされています。

本当にぶしつけな質問に対して、丁寧にお答え頂き、心から感謝いたします。  
先生のお働きの上に、神さまの恵みがありますように。

■258 ZIONさまへの回答

[山谷](#) - 2004/06/15 15:00 -

## 1. 肉のわざのリスト

キリストに結ばれた人（クリスチャン）が、キリストに結ばれ続けている（信じ続けている）なら、キリストに似たものに変えられ（聖化され）て、キリストの御霊に反するわざ（肉のわざ）が現われることはないの、キリストのからだから解く（除名する）ことにはなりません。

しかし、完全にキリストに似たものにされる（栄化される）のは、キリストの再臨の時のことです。

初臨と再臨の間の「メシア的中間時」においては、クリスチャンはくすでに・キリストに似た



者になり始めているが、いまだ・完全にキリストに似た者に完成されているわけではない>、  
というくすでに・しかし・いまだ>の時制に規定されています。

このくすでに・しかし・いまだ>という中間時にあっては、信仰共同体は、キリストから離れたクリスチャンを解き、また、悔い改めてキリストに戻ったクリスチャンをつなぐ、というく  
解き・また・つなぐ>権能を、授けられています。

そして、く解き・また・つなぐ>ために、「肉のわざのリスト」が参照されるのです。

## 2. 国家権力への服従

中間時の世界には、聖化されていない人、聖化されはじめたばかりの人、聖化されつつある人、聖化が相当進んだ人、聖化から脱落しようとする人、聖化から完全に脱落した人が、共に住んでいるのですから、く解き・また・つなぐ>教会戒規の権能だけでは、社会の秩序と安寧が維持できません。

そこで、キリスト高举によって打破され、キリストの頭首権に従属させられた悪鬼的天使的勢力が、中間時において、キリストの頭首権に由来する権力を行使して、国家を統治し、社会の秩序と安寧の維持にあたっています。これが、く国家権力を司る悪鬼的天使的勢力>である、位・主権・支配・権威です。

そして、ローマ書13章は、すべてのクリスチャンが、国家権力に従うよう命じています。これが、く中間時の中間倫理>です。

## 3. 肉のわざのリストが不要になる時

キリストが再臨してクリスチャンの聖化が完成（栄化）されると、「罪の原理」が消滅するので、肉のわざのリストが不要になります。すると、社会の秩序と安寧を維持するく国家権力を司る悪鬼的天使的勢力>の任務が終了するので、位・主権・支配・権威は、キリストの再臨と同時に滅ぼされます（1コリント15:24）。

☐ 255 ありがとうございます

内なる人 - 2004/06/15 08:17 -

zionさん、ご返事ありがとうございます。納得致しました。

☐ 254 内なる人さまへ

Zion - 2004/06/15 07:34 -

内なる人さま

ご質問ありがとうございます。

わたしのスタンスということですが、まず、再建主義者ではありません。何かしらの神学的スタンスというものに立って質問申し上げているというような高尚なレベルではないことは、私の質問を読んで頂ければ解ると思います。（何々派なり、何々主義の神学者なりの見解を語ったことはないですから）、一信徒として聖書から疑問を感じるところを率直に申し上げている者です。

よろしくお願いいたします。

☐ 253 私は召命を受けられた方を尊びたい

工兵 - 2004/06/15 00:09 -

ただのおじさま へ

私は、この主張を裏付ける根拠を明確に説明することはできません。しかしある人は、神の召命によって、生涯をかけた献身をなさるのです。

■252 私は山谷さんのmsg 2 3 1の説明で良いと思う ただのおじさん - 2004/06/14 23:46 -

「霊的権威」の問題に疑問を持っている方は、msg 2 3 1の山谷さんの説明で納得されないのでしょうか？

ある聖書理解を「異端」と判断するのはそんな安易に行って良いものなののでしょうか？

そこまでの権威を神は1人の牧師に与えているのでしょうか？

バプテスト派の人間としてはとても疑問です。

私の教会は教会員と教会は契約を持ってつながっているので、1人1人の教会員がそもそも責任が重いのです。そしてそれは、神と教会員1人1人のつながりでもあるのです。そういう制度上、牧師の任免権も教会員全体にあります。

今の話の流れを見ていくと、牧師は神に召されたから偉いのだ、という考え方が見えてきてちょっとおかしいと思います。神の召しはそこまでの権威を人間に与えるものなのでしょうか？

その様な主張を裏付ける根拠でも明確にあるのでしょうか？

■251 「霊的権威」のある方へ

工兵 - 2004/06/14 23:06 -

ここでいう「霊的権威」とは、組織に属しているということで、覆ってしまうようなものなののでしょうか。牧師が個人であれ、判断したことは、「霊的権威」をもっているのではないですか。なぜなら牧師は神によって遣わされた、霊的権威のある方であられるからです。

牧師はもともと霊的権威を授かった方ですから、異端宣告をするという時に、「霊的権威」のあるなしをもちださなくてもよいのではないですか。

なぜ、私はそれを異端である、と宣告なさらないのでしょうか。

異端宣告をするということはそのものを裁くことではなく、世に対する「警告」であると思います。

信徒は牧師の自己の霊的判断が生活に立脚したものである時、そこに神の霊的権威を見てとります。それは牧師の生き様にイエス様の姿を見るからです。

牧師から語られる言葉は神から来たことばであり、その語られることばの中に神の聖い霊を感じとります。

ある方は理性的に説教をすすめられるかもしれませんが、けれども、その語られる中で、理性の枠に納まりきれない、キリストの霊性を垣間見たとき、そこに霊的権威をもって語られていることを知るのです。

信徒は牧師がキリストによって強く雄々しくあって欲しいと願うものです。

■250 zionさんにご質問です。

内なる人 - 2004/06/14 21:55 -

zionさんのコメントを読んでいますと、どうも再建主義の立場にたっているように私は思ってしまいます。

そのため、私が勘違いしないようにできればzionさんのスタンスを教えてくださいませんか？  
また、山谷先生へのご質問は再建主義への憂慮からなされているのかどうかもお聞きしたいです。

■249 3度目の回答をよみました

Zion - 2004/06/14 19:01 -

山谷先生

いつも素早いレスポンスとたっぷりとしたお答えをありがとうございます。

いろいろと考えさせられます。

先生が精一杯答えてくださるので、つい甘えて質問してしまいます。

申し訳ございません。

よろしくお願いいたします。

1. 個々の具体的な「罪の行為」と認定する基準は、パウロの手紙であるということですね。具体的には、パウロが肉の業と規定しているリストですが、たが、このリストは素人目にみても、基本的なところは律法の禁止条項と矛盾しているように思われませんので、律法が廃棄されたという今、このような「肉の業」のリストにされ縛られるのはどうかとおもうのですが、いかがでしょうか。もし、この「肉の業」のリストが有効だとすると、それと矛盾しない律法の禁止条項も、有効だと言わざるを得なくなるのではないのでしょうか？

（教会は、新約聖書のパウロの手紙に基づいてではなく、モーセの律法に基づいてくのみ>、戒規を執行すべきだとはおもわないのですが、前回の先生の回答の中で、律法とは「<具体的な罪の行為を明示する禁止命令>と<禁止命令を破った場合の呪いの執行予告>とをワンセットにしてイスラエルに対して提示された」ものであり、前者についてはパウロがロマ7:12で言うとおりの「聖なるもの」だと、先生自身も認めておられる部分についてさえ、廃棄してしまいますと、新たな問題が発生するように思うのです。

先生が言われるように「律法に書かれているすべての条文について、厳密かつ純粹に、律法にのみ基づいて、クリスチャンに対する戒規を執行しなければならない」のかどうか私には解りませんが、「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。」（コロサイ2:16-17）とありますように、本体であるキリストによって成就し、行われなくなった様々な犠牲や礼拝関係の規定などがありますから、「すべて」ということではないと思います。）

2. 教会から「除名」された人は、キリストのからだから切り離されたと公に認定されたので、今やサタンすなわち、<国家権力を司る悪鬼的天使的勢力>の支配下に移されているのだから、国家権力が、モーセの律法に基づいてではなく、<国家の公法>に基づいて本人を裁き、必要な罰を与え、場合によっては死刑に処することさえ、するということですが、逆を言うと、教会から除名されていないクリスチャンは、<国家権力を司る悪鬼的天使的勢力>の支配下に移っていないので、国家の法に従う必要はないという意味になりますが、それでいいのでしょうか？

3. 先生は、「わたしたちが今生きている経緯は、主の初臨と再臨の間の「メシア的中間時」なのですから、エフェソ書が言うとおりの、主の十字架がモーセの律法を廃棄しても、わた

したちには、＜信仰共同体＞と＜監督と長老＞と＜パウロの手紙＞と＜国家の公法＞と＜国家権力＞が与えられていて、それらが、見張り・訓戒し・戒告し・切り離し・裁き・滅ぼし、そうして、社会の安寧と秩序を維持しているのです。」とまとめてくださいました。

そのなかで、クリスチャンの「罪を規定」する権威としてあげられた、＜信仰共同体＞と＜監督と長老＞と＜パウロの手紙＞は、結局、＜信仰共同体＞と＜監督と長老＞が、その判断の根拠として客観的な文書を必要とすることを考えれば、それは＜パウロの手紙＞だけだということをおっしゃっていると思うのですが、そうすると、福音書や、特に山上の説教のようなイエス様の教えも、律法とだぶっているからだめだということですね。ただ、私にはどうしてもパウロの「肉のリスト」さえも、律法においがプンプンするのですが、なぜ、パウロの手紙だけは良いのでしょうか。？

しつこく質問いたしまして、申し訳ございません。もしなにか差し障りがございましたら、いつでも終了いたしますので、言って頂けたら幸いです。

よろしくお願いいたします。

#### ■248 ZIONさまへの回答

[山谷](#) - 2004/06/14 16:55 -

三度目の回答をアップしましたので、お読みください。

#### [ZIONさまへの回答](#)

#### ■247 再び回答読ませて頂きました

Zion - 2004/06/14 10:54 -

山谷さま

今回も、丁寧なご回答をありがとうございました。

お答えすべてにレスポンスするべきところですが、こちらの能力不足もありますので、一点にだけ絞って、レスポンスさせていただきますこととお許しください。

私の前回の「律法は善ではないか」という質問に対しまして、先生から、

律法とは「＜具体的な罪の行為を明示する禁止命令＞と＜禁止命令を破った場合の呪いの執行予告＞とをワンセットにしてイスラエルに対して提示された」ものであり、前者についてはパウロがロマ7:12で言うとおりの「聖なるもの」であるが、後者については悪魔的天使の関与があるゆえに問題だという考え方を示して頂きました。

そして、キリストは前者については潔白であったのに、あえて後者の呪いをうけることで、後者を滅ぼした。悪魔的天使の支配を滅ぼした、と教えて頂きました。

ただ、そうなりますと、律法の中の＜具体的な罪の行為を明示する禁止命令＞については、破棄されない（聖なるゆえに）とは考えられないのでしょうか？。その点については言及がありませんでした。おそらく、先生は、律法は「セット」ゆえに、一緒に破棄されるとお考えのこととお見受けします。そして、「禁止命令」が無くなった代わりに、「律法から解放された」としても、キリストの霊がわたしたちを支配してくださるのですから、わたしたちは律法の二枚の板が要求する「神への愛と隣人への愛」を生きることが可能になるのです。」と理解をしておられると受け取りました。

ただ、その考え方を発展させますと、すでに聖霊が宿っているクリスチャンのすることは、



すべて良いことになるという危険な考え方に行き着きませんか。もちろんまだ、罪の残滓はのこっているゆえに、パウロは私たちに、聖霊に満たされ、導かれるようにと勧めるわけですが、それでは、聖霊に満たされ、導かれるようにとさえ祈っているなら、その人の行うことはすべて善となるという考え方となるのでしょうか。

もし、＜具体的な罪の行為を明示する禁止命令＞を含めて律法が廃棄されたとしますと、律法からクリスチャンの行うことについて、なんら善し悪しを言えなくなります。つまり、クリスチャンが、わたしは聖霊に導かれていると信じ、「この行為は、神を愛し、自分を愛するように隣人を愛することなのだ」と、自分の行為を絶対化してしまうことに、聖書からなんら歯止めをかけられなくなり、「あなたが聖霊に導かれていると思うなら、そうしなさい。」としかえなくなるのは、論理的必然かと思います。しかし、現実を見れば解るように、クリスチャンと言われる人々の行動が、すべて善であるということなどあり得ないのは、間違いない事実です。

それとも、律法の代わりの歯止めとして、最低限この世界の法倫理を守り、隣の人間に迷惑さえかけなければ、なにをしてもいいという、いわゆるリベラリズムの考え方を採用するのでしょうか。

律法という＜具体的な罪の行為を明示する禁止命令＞を失うとき、それをベースにしている新約聖書の倫理規定をも含めて、クリスチャンの行動倫理に対して、どのような客観的基準を持ち得るのでしょうか？

どうぞ、お忙しいことと思いますので、ご無理なさらず、適当にお時間のある時に結構です。

よろしくお願いいたします。

#### ■ 246 ZIONさまへの回答

[山谷](#) - 2004/06/14 02:14 -

再度アップしましたので、ご覧下さい。

#### [ZIONさまへの回答2](#)

#### ■ 245 単立教会の牧師の権威

[山谷](#) - 2004/06/13 22:31 -

＞単立教会の牧師が「霊的権威」をもって異端宣告ができるとするなら。個々の牧師は「霊的権威」をもって異端宣告できないのですか。

これは、その牧師が、自分が服さなければならない上位の権威を持っているか、持っていないか、の違いということです。

単立教会の牧師や、バプテス教会の牧師の場合は、自分が服さなければならない上位の権威の下にはありませんから、自分が、あるいは、その信仰共同体が、「異端だ」という判断をすれば、それを覆す人は、ほかにいないことになります。

しかし、主教・司教・監督・連隊長・中会など、牧師が、自分の服さなければならない上位の権威の下にある場合には、自分が「異端だ」と判断しても、上位の権威が「異端ではない」と判断するかもしれませんし、また逆に、自分が「異端ではない」と判断しても、上位の権威が「異端だ」と判断するかもしれません。すると、結局、異端か異端でないかの判断を下すのは、牧師ではなく、その牧師が服さなければならない上位の権威である、ということになります。

ここに、単立教会の牧師と、そうでない牧師との違いがあるのです。

■244 確かにここの内容って難しいね

ただのおじさん - 2004/06/13 08:46 -

私も牧師に確認してやっと分かる部分があるのだから。

でも神学の突っ込んだ部分を論じればやさしくはないだろうね。

私の教会の牧師はわりと易しく説明してくれるけど、それでもある程度自分で調べないといけないから。

でもためになるよ。違う立場のクリスチャンの突っ込んだ意見を聞く場ってなかなかないから感謝している。

■243 回答読ませて頂きました

Zion - 2004/06/13 04:18 -

山谷さま

いつも丁寧なお答えを感謝いたします。

少々何回で、私の頭では、なかなか租借するのが難しいのですが、私なりに理解した範囲で、またご質問をさせて頂いてよろしいでしょうか？

1. 主イエスが律法を守られたのは、主イエスが罪のないお方でなければならないということです。 「悪鬼的天使を打破して、人類を悪鬼的天使の支配から解放するためには、＜罪のないお方が律法の呪いによって十字架にかけられる＞ということが、どうしても必要」だったということですけれども、基本的な言葉の定義として教えて頂きたいのは、ここで「罪」といわれているのは悪魔的天使の制定した「律法」を守らないこと、つまり、罪とは悪魔的天使の制定した教えを守らないことを「罪」と考えてよろしいのでしょうか？

2. 「墮罪した人間は、内面的な罪だけでなく、さまざまな外面的な罪の行為を犯すであろうことは、予見されてい」て、「神は悪鬼的天使に＜悪しき人間を罰し、滅ぼす＞という任務を与え、人類の社会秩序を維持させることした」が、「悪鬼的天使は、神から与えられた秩序維持の任務を放棄し、＜自分の守るべき領分を捨てた＞ので、統制を失った人類はあらゆる悪行に走り、地に悪が満ちることとなった」

ということは、悪魔的天使の制定した律法を守らないのが内面的、外面的「罪」で、「悪しき人間」とはその「罪」を犯す人間ということになりますね。つまり、律法を守らない人間は「悪しき人間」で、その人間を天使が裁かないゆえに地に「悪」が満ちたということになると、必然的に「律法」は「悪」の反対なる「善」なるものとなるのではないのでしょうか。人間が悪行に走り「悪」が地に満ちた原因が「罪」つまり律法違反であるなら、必然的に律法は「悪」ではなく「善」なるものとなりますね？

この点に関しては、

「このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである。」ローマ7：12 のパウロの言葉もあわせて、教えて頂けますか？

3. 山上の説教は、ファリサイ派の律法学者たちの「外面的な行為による律法の義」の下に巧妙に隠蔽された「内面的な罪の現実」を暴露するために、モーセの律法をさらに先鋭化したの

だということですね。そうすると、山上の説教は罪の自覚を生み出すための教え以上の意味は無いということでしょうか？

4. 「律法の規定に基づいて」、主イエスは、「主に聖なるもの」となり、第二のアダムの中にいるすべての人類もまた、「主に聖なるもの」とされたということと、「律法の呪いから解放された」ということとの関係がいまいちよくわかりません。「律法の規定によって」＜主に聖なるもの＞とされたわたしたち人類は、同時に「律法の呪いから解放された」わけですね。つまり、「律法の規定」は生きている（「律法から解放されたわけではない）けれども、「律法の呪いからは解放された」ということでしょうか。

たびたび申し訳ございません。  
お時間があるときで結構です。  
よろしくお願いいたします。

□242 ZIONさまへの回答 [山谷](#) - 2004/06/13 00:39 -  
ZIONさまへの回答をアップしましたので、ご覧くだされば幸いです。

#### [ZIONさまの質問への回答](#)

□241 悪魔的天使・十字架の関連のレポート読みました Zion - 2004/06/12 14:43 -  
240の書き込みに、機種依存文字がありました。訂正して再度掲載いたします。

山谷さま  
丁寧なお答えを感謝いたします。

さて、主イエス・キリストが律法を守った理由は、  
1. 人としてのキリストが＜律法の呪いの下に置かれていた＞  
2. ゆえに、罪を犯したら、ただちに全宇宙のすべての悪鬼的天使が主イエスに対して呪いを執行し、主イエスは、＜御自分の犯した罪のゆえに、呪われた者となった＞となる。  
3. ゆえに人類の贖罪という使命は失敗するので、律法を守られたのだということですね。

要するに、キリストはあくまで「贖罪のために」悪魔的天使の制定された律法を守られたということですね。

では、イエス様がユダヤ人に「モーセはあなたがたに律法を与えたではないか。それなのに、あなたがたのうちには、その律法を行う者がひとりもない。あなたがたは、なぜわたしを殺そうと思っているのか」。と言われた真意はなんでしょうか。「贖罪のため」という義務のないユダヤ人たちに、悪魔的天使が制定したという律法からの自由ではなく、なぜキリストはそれを守らないのかと責めたのでしょうか？

さらに山上の説教のように、悪魔的天使による律法を先鋭化するような教えを、人々に教えられたのはなぜでしょうか。

お教え頂けたら幸いです。

☐ 239 私の律法への考え

内なる人 - 2004/06/12 03:07 -

私は律法は聖なるものだと思いますが、律法を守ることができるのは、人間が意識的に、自覚的に行っても完全には守れないと考えてます。

もし守れるとしたら、それは主の恵みおよび聖霊の働きかなと考えてます。イエス様への信仰により結果的に守れると。

だから、律法を守ることが第一に考えて生きたり、律法を国家の法として用いる必要はないかなと思います。

☐ 238 律法・天使的勢力・十字架[山谷](#) - 2004/06/12 01:04 -

悪鬼的性格を秘めた天使的勢力が律法制定に関わったのであれば、なぜ主イエスは、その律法を否定されなかったのか？

この問いについて考える小論をアップしましたので、ご覧下さい。

[律法・悪鬼的天使・十字架の連関について](#)

☐ 236 ついでに私めも

MM - 2004/06/11 17:19 -

(1)

パウロは律法は正しく聖であると宣言していますよね。  
なぜに悪霊が制定したものとなるのですかね。

(2)

もし悪霊的な律法であれば、その呪いの下から私たちを贖うために  
キリストが代価を払う必要はないのではないのでしょうか？

(3)

再建主義BBSで揶揄されておられたようですが、ご自分でご自分に  
要件を当てはめて正統宣告なされるとは、中々のユーモアと言うべきか・・・汗

☐ 235 牧師の「霊的権威」と何か。

工兵 - 2004/06/11 17:07 -

単立教会の牧師が「霊的権威」をもって異端宣告ができるとするなら。個々の牧師は「霊的権威」をもって異端宣告できないのですか。信仰共同体としての「霊的権威」と、個々の牧師のもつ「霊的権威」とは異なりますか。二つの「霊的権威」がありますか。

☐ 234 質問です

Zion - 2004/06/11 14:40 -

山谷さま

興味深いご意見を感謝します。

さて、律法が潜在的に悪鬼的性格を持つ天使を神が使役して制定されたとしますと、いろいろと疑問点が解決するというお話ですが、その反対に、疑問点が沢山浮かび上がってくるように思うのですがいかがでしょうか。たとえば、キリストはなぜ、そのような律法に対して、



「律法や預言者を廃するためにきた、と思っではならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。」マタイ5:17-18と言われたのか、また、「モーセはあなたがたに律法を与えたではないか。それなのに、あなたがたのうちには、その律法を行う者がひとりもない。あなたがたは、なぜわたしを殺そうと思っているのか」ヨハネ7: 19と、そのような律法を行わないことを非難されるのか。そして、なぜキリストご自身が、その悪魔的性格をもつ天使によって制定されたという律法を守ったのか。それは善なる神の性質と矛盾しないのか。さらに、キリストは山上の説教において、その悪魔的性格をもつ天使によって制定されたという律法を、さらに先鋭化する教えを展開されているのは、どういうことなのか、などなど、この見解によって逆に引き起こされる疑問点に対して、どのような回答をもっておられるのでしょうか。

よろしく願いいたします。

### ■233 1920年代から1940年代の状況

[山谷](#) - 2004/06/11 10:44 -

今回の再建主義者との議論の初期の段階で、「ベール問題」を天使的勢力と関係づけて見る解釈をこちらから提示したところ、「そのような解釈は聞いたことがない。山谷のオリジナルの見解か？」と言われたときから、「おや？」と思っていたことがあります。

それは、再建主義がその体系を構築するにあたって、＜中間時の中間領域と天使的勢力を見据えた救済史神学＞を、ほとんど、あるいは、まったく意識していないように見えることです。

＜中間時の中間領域と天使的勢力を見据えた救済史神学＞は、その対象領域として「国家・文化・教会」をダイレクトに扱っているわけですから、その「国家・文化・教会」を聖書に根拠して決疑論的に再構成しようと企図する再建主義者は、必ず何らかの仕方で救済史神学を論破した上で、自分たちの体系を構築しなければならなかったはず、なのです。

ところが、どうも、そうした意識が、感じられないのです。

わたしが考えるに、おそらく、1920年代末に高等批評と恩恵論の問題でメイチェンらのグループがプリンストン神学校を離脱し、ウェストミンスター神学校を設立して以降、ウェストミンスター神学校においては、時計が止まってしまっていたのかもしれませんが。

マールブルク大学のハインリッヒ・シュリーアが、新約聖書における天使的勢力の概念に注目した論文『新約聖書における諸権威と諸力』を神学雑誌に発表したのが1930年のことです。そうして、シュリーアやギュンター・デーンが提示した「天使的諸力」の問題を、ナチスとの闘争の中にあった告白教会の戦いの文脈においてカール・バルトが着目したのが、1938年の牧師会議講演『義認と法』でのことです。シュリーア、デーン、バルトの「天使的諸力」の概念を見据えて、オスカー・クルマンが『キリストと時』を著し、バルトマンの非神話化論を克服したのが1948年のことです。この「天使的諸力」の問題を、ストイケイアの概念に拡大して、文化の領域を支配する天使的諸力の問題をヘンドリクス・ベルコフが考えたのが、1950年代初期です。

これを、ウェストミンスター神学校の側から見れば、1930年当時は、高等批評を嫌ってプリンストンから分離した直後でしたから、ドイツの神学界の動向を心理的にシャットアウトしていたのは、当然であると思われる。特に、当時まだ無名の若手に過ぎなかったハインリッヒ・シュリーアの神学雑誌における論文などには、まったく関心を払わなかったであろうことは、容易に想像できます。

1940年代に入ると、不幸な第二次世界大戦のために、アメリカとドイツの間の連絡は断たれ、

神学的な交流はほぼ十年の長きにわたって停滞することになってしまいます。その間、ドイツ告白教会においては、「悪鬼的天使的諸力と国家権力」という新約聖書の神学的概念が、ナチスとの戦いの中で、注目され、解明され、発展させられて行ったのです。その果実を摘んで『キリストと時』として大成させたのがフランスの神学者オスカー・クルマンで、それは、終戦直後の1948年のことでした。

そうして、第二次世界大戦中にヨーロッパの神学界でこのような展開が進んでいたことを、物理的にも情報的にも心理的にも分断されていたウェストミンスター神学校が知る由もなかったでありましょう。

もちろん、アメリカの大学の神学部では、戦争終結と共に、ヨーロッパの神学界との交流が再開されたわけですが、ウェストミンスター神学校では、「人間の認識と神の認識は異なる」という認識論に立つヴァンティルの前提主義によって一般恩恵が否定され、＜大学の神学部での研究は、悪魔的ヒューマニズムである＞と見る、情報遮断のための理論武装が生み出されたのです。これを継承したラッシュドゥーニーは、＜悪魔的ヒューマニズム論＞によって大学全般を批判・否定し、福音派の大学や神学校すらも、その対象となりました。そうして、ホームスクーリングを提唱したのです。

このため、ヨーロッパの神学界において、シュリーアの1930年の論文に始まり1948年のクルマンの論文で大成したく中間時の中間領域における天使的勢力と国家権力・諸文化＞というテーマが、ウェストミンスター神学校、特にその中の前提主義／再建主義サークルには、ほとんど、あるいは、まったく入らなかったのであろうと思われます。

もしそうであるならば、再建主義は＜失われた1920年代から1940年代＞を取り戻すべく、新約聖書神学を再検討しなければならないことになるでしょう。

### ■231 異端宣告の要件について

[山谷](#) - 2004/06/11 09:54 -

ご質問の、異端宣告の要件については、4月9日のログNo.109で、わたし自身の考えを述べましたので、再掲します：

わたしは再建主義を異端宣告しようとは思いませんし、そもそも、だれかを異端宣告できる立場にもいません。

異端宣告のためには、要件があると思います。  
古典的なものとして、異端判別の三つの基準があります。

第一は、聖書正典です。旧新約聖書66巻を指します。  
第二は、世界信条です。エキュメニカル公会議で作成された信条です。  
第三は、地方教会です。地域の信仰共同体の信仰と生活を監督するために立てられている「霊的権威」です。改革長老教会の場合は「中会」や「大会」、ルーテル派やメソジスト派の場合は「監督」、聖公会や正教会の場合は「主教」、カトリックの場合は「司教」です。ただし、バプテストや単立教会の場合は、ひとつの教会を超える権威を上には立てませんから、個々の信仰共同体が個別に判断することになります。

聖書に照らしただけでは、異端とは宣告できませんし、世界信条に照らしただけでも、異端とは宣告できません。聖書と世界信条と、この二つに照らして異端性が明確になった場合であっても、やはり、それだけでは、異端とは宣告できません。なぜなら、異端宣告が出来るのは、

地方教会の「霊的権威」だけだからです。しかし、司教にしても、監督にしても、主教にしても、自分ひとりの判断で異端宣告することはあり得ません。必ず専門的な神学者の会議に意見を求めることになります。しかも、ひとつの大学の神学者だけでなく、複数の大学の神学者に意見を求めます。

以上が、異端宣告の要件です。これをあてはめた場合、わたしは専門的な神学者でもなく、監督でも主教でも中会議長でもありませんし、バプテストの教会総会議長でも単立教会の牧師でもありません。また、複数の大学の神学者会議に対して、再建主義についての意見を公に照会したことがあるわけでもありません。

よって、わたしは、再建主義だけでなく、だれに対してであっても、異端宣告を出来るような立場にはないことが、おわかりいただけると思います。

しかし、以上の要件を逆に、富井氏にあてはめてみるならば、やはり、富井氏もまた、他のだれをも異端と宣告できるような立場にはないことが、明らかになるでしょう。富井氏は、フルプレテリズム再建主義者やワンネスペンテコスタリズムの再建主義者に対して「異端の嫌疑が濃厚」と警告することは出来たとしても、「異端宣告」までは出来ないはずなのです。

-----  
さて、再建主義者がわたしを<マルキオンの異端>と断定するのは無理であることは、ログNo.227を見ていただければわかると思います。

そこで、<ガラテヤ3:19問題>の見解に限ってわたしを異端と断定するためには、その前に、外堀をすべて埋めなければなりません。

手順として再建主義者はまず、新約聖書神学者の山谷省吾とハンス・ヒュブナーを異端として断定しなければならないのですが、山谷省吾とハンス・ヒュブナーが服していた改革長老教会、ルーテル教会、大学神学部はいずれも、その<ガラテヤ3:19問題>の見解について両者を異端と見ておりません。

また、<ガラテヤ3:19問題>で山谷／ヒュブナーと同じ見解を持つジョージ・ブラッドフォード・ケアードについては、彼が校長であったカナダ合同教会神学校、彼がディーンアイルランド特待教授職として聖書学を講じていたオックスフォード大学、そのいずれも、ケアードを異端とは見ておりません。

☐ **229** 山谷さんへ質問です・裁きとは何ですか？                      ただのおじさん - 2004/06/10 18:51 -

裁きとは何でしょう。

裁きとは何かについては山谷さんに聞きたいですが、根拠もなしに異端宣告するのは、よくない裁きであるように思えます。裁きたいのならば正しい裁きをしましょう。神にも裁かれないように。

もっともアルミニウス主義は、カルバン主義から異端宣告された歴史があり、そのアルミニウス主義をウェスレーが取り上げた歴史があります。

☐ **228** ご回答ありがとうございます。                                      内なる人 - 2004/06/10 17:43 -

詳しい説明をしてくださり感謝です。



## □227 異端宣告の要件

山谷 - 2004/06/10 14:45 -

再建主義者側は、わたしを「マルキオンの異端だ」と宣告することで、議論を打ち切ろうとしているようです。

しかし、ひとが誰かをくマルキオンの異端>と断定するためには、その相手が「マルキオンの異端を構成する要件」に該当していなければならないのは、当然のことです。そこで、マルキオンの異端を構成する要件は、何かと言いますと：

- (1) 旧約聖書の神／世界創造の神をく悪神>とみなし、新約聖書の神／キリストの父なる神をく善神>とみなす。
- (2) 物質的世界を悪とみなす、二元論的世界観に立つ。
- (3) キリストの受肉を否定し、仮現論を説く。
- (4) 旧約聖書の全文を、悪神の手になるものとして、拒否する。
- (5) 新約聖書の全文のうち、パウロの手紙10通とルカ福音書以外は、拒否する。ただし、ルカ福音書の降誕物語と、ガラテヤ書4:4を削除する。
- (6) 反ユダヤ主義を説く。

以上が、マルキオンの異端を構成する六つの要件です。

さて、わたしは、再建主義者からくマルキオンの異端>と断定されたわけですから、本当に自分がそれにあてはまるのかどうか、自ら慎重に検討してみなければなりません。そこで、自分にこれらの要件をあてはめて見てみますと、わたしの信仰的立場は：

- (1) 旧約聖書の神／世界創造の神と、新約聖書の神／キリストの父なる神は、同一である。
- (2) 物質的世界は、神の被造物であるゆえに、善なるものである。しかし、善なる宇宙が、アダムの墮罪によって「恩恵」と「自然」に分離し、その中間領域に神が「天使的勢力」を設置したので、く「恩恵」「中間領域」「自然」という三項図式の世界観>に立つ。しかし、このく「恩恵」「中間領域」「自然」という三項図式は、アダムの墮罪からキリストの再臨までの間の一時的状態に過ぎない。「恩恵」と「自然」とは、すでに、くキリストの受肉>において調和されており、それにより生み出されたくキリストのからだ(教会)>において調和されており、くキリストの再臨>によって、全宇宙的な「恩恵」と「自然」の完全調和が実現される。
- (3) アダムの墮罪によって分離した「恩恵」と「自然」は、キリストの受肉において調和され、こうして、全宇宙は終末論的段階に突入した。墮罪した人間が、その全的墮落にもかかわらず、神の召命に対する応答能力を有しているのは、く受肉したキリストの人格における「恩恵」と「自然」との調和が、聖霊によって、墮罪した人間の意志へと照射され、それが投影されたく結合点>としての機能を果たすゆえに、人間は、神の召命への応答能力を有する>(特殊恩恵としての聖霊の照明／ケノーシス-キリスト論的な超自然的実存規定)からである。
- (4) 旧約聖書の全文は、一字一句が神が意図した通りに記された、靈感された神の言葉である。
- (5) 新約聖書の全文は、一字一句が神が意図した通りに記された、靈感された神の言葉である。それゆえに、聖書を用いて、聖書解釈法を決疑論的に構成することが可能である。ところで、ガラテヤ書においてパウロは、く後期ユダヤ教の神学概念を援用しつつ、「キリスト集中論的」な解釈方法を旧約聖書に適用し、それにより、「キリストの絶対性と永遠性」と「律法の相対性と一時性」とを対比させている>。このような、くキリスト集中論的解釈方法>こそ



が、聖書から決疑議論的に構成される解釈方法である。

(6) ユダヤ人が福音につまづいたのは、異邦人に福音が及ぶための、摂理的な配剤であって、ユダヤ人に対する神の選びは永遠に不変であり、パウロが言うように、＜最終的にはすべてのユダヤ人が救われる＞。

上記のように、マルキオンの異端を構成する六つの要件を、わたし自身に当てはめてみますと、ひとつもあてはまらないことが明らかになります。よって、再建主義者による＜異端宣告＞は、まったく根拠なし、ということになるであります。

#### ■225 ガラテヤ3:19問題

[山谷](#) - 2004/06/10 10:36 -

ガラテヤ3:19問題について、ヘルマン・ウォルフガング・バイヤー／パウル・アルトハウスの見方をご紹介します。

#### [ガラテヤ3:19問題](#)

#### ■223 悪と天使の問題（2）

[山谷](#) - 2004/06/10 10:25 -

ところで、アダムの墮罪によって、世界は「自然と恩恵」とに分裂してしまい、その間に、神は「ケルビムと剣」（天使的勢力と国家権力）を置いて、＜墮罪後の世界にあっても、人間が秩序ある安寧な生活を営むことが出来るよう、配慮を与えた＞のです。

この、「墮落した人間に秩序と安寧を与える」という天使的勢力の働きは、新約聖書の世界観的パラダイムでは、＜諸国家、諸政府、諸民族、諸文化、諸宗教＞であると見られているわけなのですが、パウロは、そのカテゴリーの中に「律法」をも含めてしまっているのです。これが、ガラテヤ3:19前後の文脈で議論されている事柄です。

パウロは、＜ストイケイア＞の概念を用いたガラテヤ3:19前後の議論を通して、「律法」を相対化して、諸民族、諸文化、諸宗教と同じカテゴリーの中に、位置づけてしまっています。

こうすることにより、パウロは、律法を相対化させ、天使的勢力を媒介とした墮罪後の旧経緯は、＜受肉による神の直接的-無媒介的なわざであるキリストの救い＞に対しては、絶対的に劣っている、と主張しているのです。

ところで、天使的勢力は、墮落した人間に秩序ある安寧な社会生活を保障するために、当然のことながら「悪しき人間を滅ぼす」という任務を帯びることになります。これが、「死の天使」、「裁きの天使」、律法に記された呪いの執行者としての「主からの悪霊」と考えられます。

しかし、「今やキリストが到来したゆえに、天使たちは無用となり、天使たちの司る宗教的祭儀は時代錯誤となり、むしろ、非難されるべきものとなった」（ジャン・ダニエルー）となったのですから、＜諸国家・諸政府・諸文化・諸宗教＞そうして＜律法＞は、役割を終えた、ということになるのです。

ところが、現在は、＜キリスト初臨と再臨の間のメシア的中間時＞であって、地上には、キリストの救いに与った信者と、いまだキリストの救いに与っていない未信者とが混在して生活しているのですから、現時点においては、まだ、天使的勢力がその職務を遂行し続けなければならない必要があるのです。

そこで、キリストの頭首権に従属する天使的勢力が、現時点において、まだなお、＜諸国家・諸政府・諸民族・諸文化・諸宗教＞を動かし、社会の秩序と安寧を維持しているわけです。

そうしてキリスト者は、国家権力に関してのみ、キリスト者の良心に反しない限り、国家権力に服従するよう、命じられているのです。これが＜中間時の中間倫理＞です。

しかし、キリスト者は、＜諸民族・諸文化・諸宗教＞については、もはや、服従するようには言われていません。それゆえ、キリスト者は＜超民族的経綸＞を生きることが出来、あらゆる文化を相対化して批判することが出来、しかも、＜律法を含めたあらゆる宗教＞から解放されているのです。

しかし、キリスト者は「諸民族・諸文化・諸宗教を滅ぼすように」とは、命じられていません。また、物理的・政治的強制力によってそれらを征服するように、とも命じられていません。なぜなら、それらは、ストイケイアが、未信者の秩序ある安寧な生活を保障するために、キリストの頭首権の下で担当している旧経綸の領域だからです。

しかし、キリストが再臨するとき、つまり、メシア的中間時が終わるときには、諸国家・諸政府・諸民族・諸文化・諸宗教もまた、天使的勢力と共にその役目を終えて、＜天にあるもの、地にあるもの、すべてが、キリストにあってひとつにまとめられる＞（エフェソ1:10）でありましょう。

## □222 悪と天使の問題（1）

[山谷](#) - 2004/06/10 10:25 -

＞確かサタンは以前天使であったと思うんですが、律法の制定に関わった天使たちもサタンのように堕ちていく可能性がある、つまりサタンのようになるという悪鬼的性格を持つために、そのような天使たちが関わった律法を再建主義者の人達の様に絶対視する必要はないということですか？

現代人であるわたしたちにとって理解しにくいのが、＜神が、潜在的に悪鬼的性格を秘めた天使たちをも、使役しておられる＞という、旧約聖書の世界観的パラダイムでありましょう。

これは、「神は、なぜ世界に悪が存在している現状を、許容しておられるのか」という、神義論にも関連して来る問題です。

通常、悪の問題について神義論が出す解答は、（1）自由意志を持つ理性的被造物を創造したことから、不可避免的に悪が生じたのであり、（2）そのようにして生じた悪を、神は最終的な善の勝利のために、摂理的に用いることが出来る、というものです。

この（2）から、「摂理論」という、組織神学上のひとつの部門が立てられることになります。

天使的勢力については、この「摂理論」の中で取り扱われることになっているのですが、天使論の下位部門として「悪魔論」が置かれています。

これは何を意味しているかと言いますと、＜神が、天使という「自由意志を持った理性的被造物」を創造した結果、不可避免的に、悪鬼化する天使が出現したが、全能の神はそのことを予見しておられて、「最終的な善の完全勝利」という御自分の目的のために、悪鬼的天使をも摂理的に用いておられる＞ということになるのです。

この、＜神は、最終的な善の完全勝利のために、悪鬼的天使をも摂理的に用いておられる＞という摂理論のテーマは、新約聖書においては、＜キリストの十字架・復活・高挙によって打破され、武装解除され、キリストの頭首権に対して従属させられ、奉仕させられている、潜在的に悪鬼的性格を秘めた天使的勢力＞（エフェソ書、コロサイ書）という表現で、示されています。

このように考えることによって、神義論上の課題である「神は悪の直接原因ではない」という命題が確保され、悪の直接的原因が「理性的被造物の自由意志」へ、つまり、天使論上の課題へ移行され、その移行した先が、「潜在的に悪鬼的性格を秘めた天使的勢力」ということになるのです。

□221 すごい！

自由キリスト者 - 2004/06/10 01:12 -

218番の山谷先生の解説は、すごいですね。  
私は、舌を巻いた。神学的ウルトラC！！  
旧約聖書がより身近にわかりやすくなりますね。

□220 納得です。

内なる人 - 2004/06/09 21:50 -

山谷先生の冷静で落ち着いた説明ありがとうございます。

それで一つお聞きしたいです。

確かサタンは以前天使であったと思うんですが、律法の制定に関わった天使たちもサタンのように堕ちていく可能性がある、つまりサタンのようにするという悪鬼的性格を持つために

そのような天使たちが関わった律法を再建主義者の人達の様に絶対視する必要はないということですか？

□219 天使と律法の問題（3）

[山谷](#) - 2004/06/09 14:02 -

ストイケイアの問題を理解する上で、フランシスコ会聖書研究所訳の新約聖書の脚注が参考になりますので、以下にご紹介します。

—以下引用—

ガラテヤ書4:1-11は、3章後半に続いて律法の役割を扱っており、律法の束縛とキリストによる自由とを対比する見地から述べている。ここにあげられている最初のたとえば、父の財産を相続した未成年者の場合であり、彼の後見人や管理人は、3:24の養育係と同じようなものである。「養育係」は単数形で律法全体を指し、2節の「後見人」「管理人」はそれぞれ複数形で3節の「宇宙の構成にたずさわる諸霊」に附合する。

「宇宙の構成にたずさわる諸霊」とここに訳出したギリシア語の句は、多様に解釈されている。この述語はコロサイ2:8-20にも見られ、またガラテヤ4:9では、「あの無力でなんの助けにもならない『諸霊』」という形で出る。本句は前節の「後見人」や「管理人」に附合し、また、コロサイ2:8-20では、キリストと対比されていると考えられるので、「霊的存在者」と解するのは適当と思われる。当時は「霊的存在者」が、諸元素や天体や各民族全体を支配すると考えられていた（例えば黙示録16:5の「水を司る天使」、ダニエル10:13-21参照）。また、天



体そのものが霊的存在だとも考えられていた（ユダ13、エフェソ3:10、6:12参照）。特に天体との関係があるとみなされた場合は、人間の祭儀執行のための「日、月、季節、年」を司ると考えられていた。

## □218 天使と律法の問題（2）

山谷 - 2004/06/09 13:52 -

ところで、問題は、律法制定に関わった天使たちが、＜潜在的に悪鬼的性格を持つ天使たちであったのか、そうでなかったのか＞という点です。

＜律法制定の天使たちに潜在的な悪鬼的性格があった＞と見るのが、新約聖書神学者の山谷省吾とハンス・ヒュブナーです。ルター派では、律法を「悪しき暴君」と考える伝統がルター以来あるので、このような見解が出て来ます。

一方、必ずしも悪鬼的性格が見られるわけではない、とする立場が、第二バチカン公会議後の代表的なカトリックの神学者ジャン・ダニエル・枢機卿です。

＜律法制定に関わった天使的勢力を悪鬼的であったと見るか、見ないか＞という点において、神学者間で見解が分かれるわけですが、この問題を考える鍵となるのが、ガラテヤ書における「ストイケイア」の用法です。

ガラテヤ3:19でパウロは、天使たちによる律法制定を述べ、その後の文脈で、＜律法の支配の下に戻ることは、ストイケイアの支配の下に戻ることである＞と述べています。

このストイケイアを、新改訳聖書は「幼稚な教え」と訳しており、一方、新共同訳聖書は「この世を支配する諸霊」、フランシスコ会訳は「宇宙の構成にたずさわる諸霊」と訳しています。

「幼稚な教え」を採用した場合は、文脈から見て、＜律法は幼稚な教えである＞ということになり、「この世を支配する諸霊」を採用した場合は、＜律法制定に関わった天使たちは、この世を支配する諸霊である＞ということになります。

後者の＜ストイケイアは「宇宙の構成に関わる諸霊」である＞とする見方に立って、さらに新約聖書神学的に考えるならば、改革派の神学者ヘンドリクス・ベルコフが『キリストと諸権力』で分析しているように、＜ストイケイアとは潜在的に悪鬼的性格を持ち、キリスト高挙によって打破され、キリストの頭首権に従属させられた天使的勢力＞ということになります。

ここから、山谷省吾やハンス・ヒュブナーが言う、＜律法制定に関わった天使的勢力は、悪鬼的性格を有する＞という見解が出てくるわけです。

上記見解に従った場合には、次のような解釈学的な利点が生れます。すなわち：

（1）律法に記された「呪い」の執行者は、神御自身ではなく、悪鬼的性格を秘めた天使であることを、過越の夜に裁きをもたらした「死の天使」と、整合的に説明できる。

（2）律法に記された「呪い」を回避する「贖罪の日」（レビ記16章）のいけにえを、なぜ＜悪鬼的天使と推定されるアザゼル＞に対してささげなければならなかったかが、整合的に説明できる。

（3）律法に反して、自ら祭壇に犠牲をささげたサウル王に、なぜ「主からの悪霊」が臨んだかが、整合的に説明できる。



（４）＜キリストの十字架の死と同時に、ケルビム（天使的勢力）が意匠された神殿の垂れ幕が、上から下まで裂けた＞という事実と、＜キリストの十字架の死によって、天使的勢力が打破され、武装解除され、キリストの頭首権に従属させられた＞という事実を、整合的に説明できる。

・・・以上のように、＜律法制定に関わったストイケイアは「この世を支配する諸霊」である＞と見た場合に、聖書解釈の整合性が、より高まることになります。

このような、＜キリストの十字架・復活・高挙による全宇宙的勝利＞という視点に立って、聖書全体をキリスト集中論的に見ようとするのがパウロの聖書解釈法であり、パウロの神学であるのです。

#### ■215 天使と律法の問題（１）

[山谷](#) - 2004/06/09 13:46 -

厳密に言うなら、神が「自らの指」で記されたのは、「十戒」の部分です。それ以外の部分は、シナイ山で語られたことをモーセが聞き、それを、モーセが書き記しました。それゆえ、パウロが「天使たちを通して、仲介者の手を経て定められました」と言っている「仲介者」とは、モーセのことを指していると考えられます。

そこで、シナイ山で与えられた「律法」については：

- （１）神が自らの指で記された十戒の二枚の板の部分
- （２）天使たちを通して語られ、モーセの手で記された部分
- ・・・という、二つから成っていたことになります。

律法が天使たちを通して与えられたことについて、新約聖書は次の箇所で触れています：

「天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした」（使徒言行録7:53）

「律法は、約束を与えられたあの子孫が来られるときまで、違犯を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです」（ガラテヤ3:19）

「この人（モーセ）が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです」（使徒言行録7:38）

「天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違犯や不従順が当然な罰を受けたとするならば」（ヘブライ2:2）

#### ■214 質問です

WHO - 2004/06/09 08:12 -

律法は神が自らの指で石の板に書き記したのではなかったでしょうか？

#### ■213 「xxの壁」の位置

[山谷](#) - 2004/06/08 10:36 -

東京神学大学教授で、口語訳新約聖書の中心的翻訳者である山谷省吾の『ガラテヤ書注解』を紹介したことから、再建主義者たちの頭の中は、大混乱を来たしているようです。

再建主義者は、神と悪魔しか存在しない二元論的パラダイムで生きているために、新約聖書の「三項図式」の世界観的パラダイムを理解するのが難しいのでしょうか。おそらく、ここに、《xxの壁》が存在しているのではないのでしょうか？

パウロがガラテヤ書において、律法に批判的検討を加えていることは明らかであり、その律法批判の神学的手法として「天使的仲介」の概念を使用していることは、否定しようのない事実です。

ガラテヤ3:19前後の文脈においてパウロは、「律法」を次のように考えています。すなわち、律法は：

- (1) 「恵みの契約」に後から付け足されたものである。
- (2) その有効期間は、「信仰による救い」が到来するまでである。
- (3) 天使的勢力を仲介として制定された。
- (4) その天使的勢力は、「無力で頼りにならない支配する諸霊」である。
- (5) 律法の下に戻ることは、「無力で頼りにならない支配する諸霊」の下に戻ることを意味する。

これに対比させてパウロは、キリストによる救いの絶対優位を説いています。すなわち、＜キリストを信じる「信仰による救い」は、天使的媒介を経ない、直接的な神の救いのわざである＞のです。

このようなパウロの論理展開を理解するには、神と人の間に存在している、＜キリスト高挙によって打破され、キリストの頭首権に従属させられている、潜在的に悪鬼的性格を持つ天使的勢力＞について、きちんと把握していなければなりません。

そうでないと、＜「天使的仲介を経て制定された律法」に対して、「仲介を経ずに直接もたらされたキリストの救い」が、なぜ優位に立つのか？＞、また、＜「律法の下に逆戻りすること」が、なぜ「無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りすること」になるのか？＞という問いが、理解不能になってしまうのです。

再建主義の「二元論的パラダイム」と、新約聖書の「三項図式のパラダイム」との間にある、《xxの壁》は、わたしが考えるに、「近代の世界観」と「新約時代の世界観」との間の、乗り越え難い壁、ということなのではないかと思います。

これが乗り越えられないとしたら、結局、＜再建主義とは、近代的世界観の産物に過ぎない＞と断定するしかないであります。

## ■ 212 ガラテヤ3:19の「天使と律法」の問題

[山谷](#) - 2004/06/07 14:32 -

以下は、ガラテヤ3:19に見える「天使と律法」の問題についての、新約聖書神学者・山谷省吾の見解です。

「律法が、このように低い価値しか持ち得ないことは、その起源について考えても、わかる。すなわち、それは、第一に**天使によって定められ**、第二に**仲介者の手を経て**与えられている。

律法が天使によって授けられたことは、使徒行伝7:53、ヘブル書2:2そのほか、聖書以外の文献にも出ている。当時のユダヤ教は、神と人間との間に天使・神の知恵・神の語等のような中間者を立てて、両者の交通の媒介を司らせていたが、律法が神によってではなく、天使によって与えられたことは、律法の無価値を示すことになる。

ここで考えられた天使は、墮落した天使、悪しき天使、神と異なり、サタンと連合した天使

であり、したがって、律法は神の意志に合しない悪鬼的・サタンの響きを宿すことになる」

(山谷省吾『新約聖書・新訳と解釈(1)テサロニケ前後書・ガラテヤ書』長崎書店、1930年、192ページ)

上記のような、律法の制定に関わる天使的勢力を「悪鬼的・サタンの」と見る見方は、ドイツの現代の新約聖書神学者ハンス・ヒュブナーによっても採用されています。

パウロは、「中間時の中間領域の天使的勢力」あるいは「ストイケイア」（宇宙の構成に関わる諸霊、この世の諸霊）の概念を用いることにより、律法を批判的に取り扱うという神学的方法を、ガラテヤ書において使用しています。

このような方法を採らずに、＜神が直接に律法を制定した＞という非聖書的考え方をしてしまうと、律法を批判することは、すなわち、旧約聖書の神をデミウルゴス（悪しき神）と見てしまった、マルキオンの異端に陥ることになってしまいます。

「中間時の中間領域の天使的勢力」という概念が、いかに重要な鍵概念であるかが、わかります。

■211 国家・社会・教会 カルヴァン派の表現によれば [山谷](#) - 2004/06/07 13:44 -  
さて、ログNo.210で述べた「国家・社会・教会」の関係については、カルヴァンの神学の立場からは、次のように表現されています。すなわち：

「カルヴァンは、市民社会と政治社会との自主性を固く確立した。国家、社会、政治、科学は、それらが一般恩寵の賜物であるがゆえに、**神から自立しているのではない**。しかし、神のもう一つの賜物、もう一つの制度である**教会からは自立している**」  
(ユージェヌ・ショワジー「カルヴァンの恩恵論に関する会議での講演」1930年)

さて、上記の命題は、一般恩恵が存在すると考えてこそ成り立つものですが、しかし、仮に一般恩恵の存在が完全否定されたとしても、＜国家と文化の本質は天使的勢力（主権、位、支配、権威、ストイケイア）である＞とする新約聖書の世界観的パラダイムに依拠することにより、上記の命題を、次のように書き換えることが可能なのです。すなわち：

「国家、社会、政治、科学は、それらが＜中間時の中間領域を占める天使的勢力（位・主権・支配・権威・ストイケイア）が構成し支配するもの＞であるがゆえに、**神から自立しているのではない**。しかし、神のもう一つの賜物、もう一つの制度である**教会からは自立している**」

上記のように書き換えられた命題を、さらに否定しようとするのであれば、新約聖書の世界観的パラダイムをも否定して、ブルトマンの言うような「聖書の非神話化」を行うほかないでしょう。

※ユージェヌ・ショワジー (1866-1949)

スイスの歴史神学者。ジュネーヴ牧師会議長。ジュネーヴ大学教会史教授。スイス福音主義教会連合議長を歴任。

■210 国家・社会・教会 [山谷](#) - 2004/06/07 12:01 -

「新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づく、三位一体的統治の概念図」を見ると、国家・社会・教会の相互関係を上手く説明することが可能になります。

すなわち、国家は神に対して自立していないが、社会と教会に対して自立している。

社会は神に対して自立していないが、国家と教会に対して自立している。

教会は神に対して自立していないが、国家と社会に対して自立している。

ここから、今年あたりになってわが国でも問題となってきた、「国家の最終権威と、社会の自由の問題」について、有効な解答を出すことが出来るでしょう。

すなわち、社会は、キリストの頭首権に由来する宇宙論的な15の法領域に分岐した「社会の分散主権」であるゆえに、「国家からも、教会からも自立した、キリスト頭首権に由来する自由を有する」のです。

この自由は侵害されやすいものであるゆえに、国家と「国民である市民」との間で「明文化された政治契約」（憲法）を結ぶことによって、この自由を確かなものとして来たという、歴史的経緯があります。

それら、明文化された政治契約によって確かなものとされた「社会の自由」とは：

生命・身体・財産の自由  
思想・信条・内心の自由  
言論・集会・出版・結社・学問の自由  
職業選択・居住地選択・配偶者選択の自由

これらが、明文化された政治契約によって確かにされた、国家に対する「社会の自由」です。

この＜明文化された政治契約＞が侵される場合には、国家権力の本質を成すところの天使的勢力（主権・位・支配・権威）が、＜キリストの頭首権に由来する国家の絶対主権を濫用して、悪鬼的性格を露見させた＞と見る事が出来るであります。

そこで、このようなく国家権力の悪鬼化＞を抑制するシステムとして、司法権・立法権・行政権が分立され、さらに、「国民である市民の政治参加のシステム」（選挙権と代議制民主主義）とが形成されてきた、という歴史的経緯があります。

つまり、「この世の歴史は、新約聖書の世界観的パラダイムに沿って進行して来た」と見る事が出来るのです。

ところで、国家に対して自由である社会を成すところの「社会の分散主権」は、ストイケイア、すなわち、宇宙の構成に関わる諸霊であるのですから、これもまた、潜在的な悪鬼的性格を持っているのであり、これが、キリスト高挙によって打破され、キリストの頭首権に対して服従させられているのです。

ですので、国家権力の悪鬼化とは別に、社会あるいは文化の悪鬼化という事態も起こり得るわけです。

それゆえ、教会は、文化の悪鬼化という事態に際しては、預言者的声を挙げ、また、自らが触媒となって、文化的変革を推進する必要があります。これが、「世の光、地の塩」としての教



会のミッションでありましょう。

## ■209 三位一体的統治の概念図

[山谷](#) - 2004/06/03 22:12 -

新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づく、三位一体的統治の概念図を、アップしました。

これをご覧頂くと、包括主義でもなく、宗教多元主義でもなく、再建主義でもない、「救済史的パラダイム」のユニークさがお分かりいただけると思います。

### [三位一体的統治の概念図](#)

## ■208 ディスペンセーション主義の分限

[山谷](#) - 2004/05/31 16:53 -

キリスト者が主から託されたメッセージは、＜時や時期は、あなたがたの知るところではない＞（使徒1:7）であり、＜時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい＞（マルコ1:15）でもあります。これは、初臨によってすでにわたしたちは終末に突入しているが、いまだ徹底的終末は到来していないし、それが何時になるかわからないという、＜すでに-しかし-いまだ＞という、「中間時の時制」に規定された使信なのです。

ディスペンセーション主義者が「何月何日をもって艱難時代に突入した」と主張したとしたら、それは、＜中間時の時制を逸脱する＞ことになります。つまり、新約聖書の使信の基本時制である＜すでに-しかし-いまだ＞という規制を、自らの言説で否定し、非新約聖書的な使信を発してしまっているのです。

それでは、＜何月何日をもって艱難時代に突入した＞という使信は、いったいだれが責任をもって発すればよいのでしょうか？

新約聖書を見るならば、そのようなく徹底的終末の到来についての使信＞は、教会に負わされた務めではなく、大天使に負わされた務めなのです。すなわち、テサロニケ前書4:15以下に、

「合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から下って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます」

・・・とされている通りです。

ここでは、キリスト者の空中携挙については、号令を発するのも、合図のラッパを鳴り響かせるのも、共に、大天使の務めである、と説明されています。これを裏書する黙示録4:1では、こう言われています。

「見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた。『ここへ上がって来い』」

ですから、ディスペンセーション主義に立つキリスト者は、＜徹底的終末が、いつ、どのように起きるか＞という「時や時期」の問題（使徒1:7）については、そもそも考える必要がないのです。なぜなら、主御自身が「あなたがたの知るところではない」と言明しておられるからです。本当の前提主義に立つならば、聖書が「あなたがたにはわからない」と言っている点については、わたしたちも、「わからない」と言うべきでしょう。

そうして、＜徹底的終末は何月何日に開始される＞という使信は、教会に託されているのではなく、大天使に託されているのですから、キリスト者は大天使の領分を侵すべきではないのです。その日、その時になれば、神の命によって大天使が合図の号令を出して、鳴り響くラッパによって、全世界に対して間違いようのない告知が行われるからです。

キリスト者に託された使信はあくまで＜神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信ぜよ＞であるのですから、＜すでに-しかし-いまだ＞という「中間時の時制」に規定されつつ、忠実にその使信を伝え続けて行けばよいのです。

それでは、教会は、自らが携挙された後の世界については、どのような責任を果たせばよいのでしょうか？

教会は、地上において、＜キリストの頭首権に服する、潜在的に悪鬼的性格を持つ天使的勢力である、国家権力＞を監視し、国家権力が悪鬼化しないよう「預言者の声」を挙げていくという使命を与えられています。しかし、教会が地上から取り去られたならば、もはや「国家権力を監視する」という使命は、果たしようがありません。つまり、パウロが言う「不法の秘密の力は既に働いています。ただそれは、今のところ抑えている者が、取り除かれるまでのことです」（テサロニケ後書2:7）という聖句が成就して、教会が地上から取り除かれ、その結果、国家権力の露骨な悪鬼化が開始されることになるのでしょうか。その開始と過程と結末を絵画的に描写したものが、黙示録であるといえます。

逆に言えば、教会が携挙されるまでは、キリスト者は、その良心に基づく抵抗権を行使して、国家権力の悪鬼化を抑制し、それによって、＜神の、キリストの頭首権による、諸国家を通じた地上の支配＞を確実なものとすることができるのですから、「平和のために働くキリスト者の仕事は、歴史が終焉するまでは、終わりなく、休みなく、続く」のです。

しかし、徹底的終末が開始されたならば、つまり、歴史の終焉が到来したのならば、もはや、キリスト者の仕事は、天の次元に移行せざるを得ないでしょう。なぜなら、＜歴史が終焉したならば、もはやだれも、歴史の営みを行うことは、不可能となる＞からです。「光のあるうちに、光の中を歩め」と言われた主の御言葉は、それを指しているではありませんか。

## ■ 207 一般恩恵論

[山谷](#) - 2004/05/31 11:59 -

再建主義者は「一般恩恵は存在しない」という看板を掲げているものの、必ずしも、再建主義陣営の中では、一般恩恵に関する統一見解が存在するわけではなく、ゲイリー・ノースのように「呪いとしての一般恩恵」を説く立場もあることから、正確には「再建主義は一般恩恵を否定する傾向にある」と言ったほうがよいでしょう。

もっとも、一般恩恵を完全否定する再建主義者にしても、異教徒の理性能力については、「全的墮落」では説明がつかなくなってしまうから、創造の秩序としての「イマゴ・デイ」によって説明することになります。

そこで、可能な立場としては：

- (1) 一般恩恵を否定し、全的墮落を、一部の理性能力に関して保留する立場。（保留付全的墮落論）
- (2) 一般恩恵を否定し、イマゴ・デイに、理性能力を帰する立場。（創造の秩序論）
- (3) 一般恩恵を否定し、全的墮落に、全部の理性能力を含める立場。（徹底的全的墮落論）

バルトとブルナーの「イマゴ・デイ」論争では、バルトは（3）に近い立場を取っていたよ

うに思われます。再建主義者の多くも（３）の立場を取るのかもしれませんが。  
この場合は、「全的墮落のゆえに、異教徒の理性能力を説明できない」と考えるのではなく、  
「異教徒の理性能力は、全的墮落の結果である」という、逆転の発想をするのだろうと思います。

このあたりから、「人間の認識と、神の認識は、異なっている」という、ヴァンティルの認識論が出て来て、その結果が、「前提主義」になるのでしょうか。  
つまり、異教徒の理性能力は、全的墮落の産物であるから、理性を前提とすることは出来ず、聖書から出発しなければならない、ということです。

さて、問題は、この先です。

バルトの場合は、ナチスとの闘争から、「国家権力は、キリストの頭首権に服する、潜在的に悪鬼的性格を持つ天使的勢力である」との立場を取って来ました。  
これですと、（３）の＜一般恩恵を否定し、全的墮落に、全部の理性能力を含める立場（徹底的全的墮落論）＞に立ちつつ、しかも、＜政治を、聖書に根拠して、決疑論的に構成する＞というミッションからは、解放されることが出来ます。なぜなら、「国家権力は、一般恩恵の産物ではなく、天使的勢力である」からです。ただし、＜教会は、国家権力を監視し、悪鬼化を防ぐ＞というミッションを負うことにはなります。


これに対して、再建主義者の場合は、「国家権力は、ヒューマニズムの産物である」と考えるわけですから、（３）の＜一般恩恵を否定し、全的墮落に、全部の理性能力を含める立場（徹底的全的墮落論）＞に立つならば、それは同時に、＜政治を、聖書に根拠して、決疑論的に構成する＞というミッションを負うのでない限り、「人間と神との間に真空の中間領域が存在し続ける」ということになります。  
ここから、「真空の中間領域を征服する」べく、再建主義の政治的アジェンダが上程されることになるのです。

しかし、（３）の＜一般恩恵を否定し、全的墮落に、全部の理性能力を含める立場（徹底的全的墮落論）＞に立つならば、キリスト者が征服すべきは、政治の領域だけではなく、「宇宙論的な15の法領域」のすべてに及ぶわけですから、政治のみならず、学問、音楽、美術、舞踊、演劇、文学、スポーツ、ファッション、料理、建築、科学技術、経済についても、必ず聖書に根拠して決疑論的に構成しなければならないのです。

なぜなら、異教徒の理性能力は、全的墮落の結果であると考えからです。

そこで、悪魔的ではない料理を食べ、悪魔的ではない野球を楽しみ、悪魔的ではない音楽を聴き、悪魔的ではない服装を着るには、聖書を参照するしか、方法がないことになります。

もっとも、現実には、聖書を根拠にこれらすべてを決疑論的に構成することは非常に困難ですので、再建主義者は＜聖書に指示されていないことについては、すべて自由である＞という逃げ手を打つのです。

 **206** 私はヴァンティルよりフレームだな

ただのおじさん - 2004/05/29 10:35 -

私が弁証学を最初に学んだテキストは、

「キリスト教弁証学入門 ～神の栄光のために～」（ジョン・M・フレーム著）〔いのちのことば社発売〕

です。彼は一般恩恵を否定していないから、一般恩恵を認めている私にも違和感がないからね。これ入門だと言っているけれどいうけれども、山谷さんあたりから見ての入門書なのであって、内容は大学のテキスト並と著者が言っているので、神学校でも弁証学のテキストとして使っているところがあるかも知れない。フレームさん、一般恩恵を認めているので、ヴァンティル直系の人からは嫌われているらしい。

---

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)